

競争の必要上から出たものだとしても、それだけで改造の要求を外界順應性の表現と見ることは妥當ではない。否外界順應性とか生存競争とかいふものは、むしろ所謂『第二の天性』を構成した習慣の表現であつて、決して吾々の本然性そのものではない。吾々の本然性は前にも言つたやうに、むしろ能動的な積極的な創造的動向そのものである。永遠に自發自展的な自由性そのものである。飽くまでも自律的な自己承認的なそしてその意味において、それ自身の動向のうちに普遍的な價值と無限の權威とを有つた創造性そのものである。従つて吾々の本然性は決して環境に順應することを目的としたり、或はそれによつて自己の生存を全ふせんとするものではなく、却つてその反對に環境を改造して、若しくは自發的に創造して、それによつて自己の自由を表現し自己の價值を具體化せんとするものである。だから、それはたとへ改造された理想的な新社會においても、いつまでも受動的に満足してゐるものではない。況して尙ほ更それに順應せんとするものではない。その永遠の創造的本性によつて限りなく理想の飛躍と社會の改造とを續けるであらう。

ところが單に生活の状態や社會制度の改造にのみ價值を認めて、そこに將來におけるユートピアを空想するが如きは、全く人間の本然性を理解しないものである。或はそれを器械視し物質視してゐるのである。たとへば方圓孰れの器物にも盛られ得る水のやうに、人間の性質もその環境に従つて順應するものと考へてゐる。即ち生活とか社會とか國家とかいふ環境的器物を先づ造つて、その中に凡ての人間を盛り入れようとするのである。そこに果して吾々人間性の満足があり得るであらうか、又そこに眞の改造が成し遂げ得らるゝであらうか。舊き酒はいかに新しき革袋に盛られても、それが爲めに決して新しくはならぬ。古い人間は改造された新社會に入つて生活しても、決してそれが爲めにその本然性は改造されぬ。たとへ或る程度まで改造され得るとしても、環境によつて受動的に改造されたものは所詮『第二の天性』たる習慣そのものに過ぎない、その本然性は依然として改造されないのみでなく、却つてますますその本來の要求と動向とを麻痺せしむるものである。この點から云へば余は世上紛々たる現代の改造論には甚だ物足らなく感ずるものである。徒らに

社會の組織や外部の事情のみを改造して、そこに現代の人間を解放しようとすることは、一方から見ればいかにも人間の本性を向上せしむるやうに見えて、而かも實はたゞ變つた環境のうちに人間性を順應せしむるに過ぎない、殊に人間の本性に未だ改造の要求の萌芽しない時において然りである。そは嘗に強ひて順應せしむるのみでなく、その結果吾々の本然性を一層内面的に習慣化することであることを忘れてはならぬ。習慣化といふことは前述の如く本然性の墮落であり頽廢である。ラッセルも言つてゐるやうに、一般の社會主義者はたとへいかなる改造の方法を提供するにしても、人間を物質的に觀る限りその本質において誤つて居る。即ち單に經濟組織の更改によつてのみ人類の幸福を齎らし得ると思惟するが如きは、全く人間の本質を見誤つたものである。従つて經濟組織の改造原理たる社會的正義といふことも、單に抽象的なそして彼等に都合のよい概念であつて、何もそれが唯一の原理であるとは考へられない。彼等はたゞ表面を裝飾する正義の概念に眩惑して、その後を而かもより深いところに激刺たる生命、一切を包含し展開する創造的生命的の潜

在するを忘却したものである。之れと同じく現代多くの改造論者が、徒らに經濟や産業組織の更改や、凡らゆる生活狀態の改造のみに腐心し没頭して顧みず、或はその改造された社會狀態に順應することによつて人間の本性が向上するものと樂觀するが如きは、その努力その勇氣は嘉納すべしとしても、人間の創造的必然的な本然性を誤解し若しくは忘却したことは、彼等の根本誤謬として何うしても見逃すことは出来ぬ。社會の改造といひ生活の改造といひ、詮ずるところ人間そのもの、改造でなければならぬ。單に環境や組織を改造することではなくて吾々の内面性を改造することではなければならぬ。或は單に外界順應性を促進し向上せしむることではなくて、本然性を創造的自由を自發的に展開せしむることではなければならぬ。それが爲めには吾々の本性をして凡らゆる習慣化、特に深く内面化され天性化された一層強烈な習慣の囚虜に對して根本的解脱を獲得せしめねばならぬ。否らざれば現代の社會改造は決して徹底的に實現されないと同時に、その改造に創造的な自由と意義とを認めることは出来ぬ。要するに眞の改造は強制的でなくて自發的でなければならぬ、

順應的でなくて創造的でなければならぬ。一言すれば人間性の改造が凡らゆる社會改造の根據であり基礎でなければならぬ。即ち一切の改造が人間改造の必然的な結果でなければならぬ。

## 2 習慣の誘惑と外界順應性

改造論者は或は言ふであらう、「君の言ふところは迂遠なる空論である。既に社會の改造といふ、その背後に又は根柢に熾烈な人間性の自覺を豫想するものではないか。外部の改造は言ふまでもなく内面的自覺の發現ではないか。否らざれば改造といふとは起り得ない。君のいふやうに外部の環境のみを改造してそこに人間を箴め込むといふとは、實際にあり得ないとである。或は一步を譲つてたとへ人間の内面的自覺がないとしても、改造そのものを批難する理由はないではないか、改造その物はそれ自身で價値の有とではないか、況て社會的正義といふ一般の原理に依つて凡ての組織を改造すれば眠れる民衆の心も自然と覺醒し向上して來るではないか」と。

成る程この反駁には相當の理由がある、余はそれを強ひて否認するものではない。併し單にそれ丈の理由ならば、眞の改造は到底覺束ないと思ふ。何故なれば論者の理由なるものは、餘りに表面的でして餘りに樂觀的であるから、否更に論者は人間の本性そのものを深刻に擱んでゐないからである。改造には勿論内面的自覺を豫想する、けれどもその内面的自覺は眞に本性の直接表現なりや否や、いかにして判斷するか。眞の自覺は固より本性の自己承認でなければならぬ、併し本性の自己承認といふ自由意識は、いかにして擱み得るか。例へば一個の毬を壁に投げつけば、その反動によつて強く跳ね返へす、この反動は物體の力學的法則によつて支配されてゐるものであるが、それが毬の本性であらうか。「水も搏つて之躍らさば類をも過さしめ、激して之を行らば山にも在らしむる」ことが出来る、併しそれは水の本性ではあるまい。若し人間の本性が階級間の鬭争において見るやうな物質的反動、若しくは生物學的な生存競争にあるならば、その内面的自覺は即ち本性の發現として改造の原理たることが出来よう。併し反動や競争は決して人間

の本然性ではあるまい。従つてそれは何等の原理をも光明をも指示しないものである。たとへ反動や競争に本然性の閃めきがあるとしても、それをもつて直ちに全的な純粹の本然性に見做すことは、早計でもあり且つ危険でもある。否謂はゆる本然性の閃めきなるものは、實は大に警戒を要するものである、何故なれば前にも述べたやうに、吾々には既に殆んど天性化された習慣の誘惑が、こびり付いてゐるからである。従つて眞の内面的自覺であり本然性の閃きであると考えたことも、案外つまりらぬ習慣の操縦に捉はれてゐないとも限らない。或は眞の改造だと考へてやつたことも、單に表面の色彩を更えた若しくは左右の位置を更えたやうな反覆に過ぎないこともある。

こゝで吾々の注意せねばならぬことは、謂はゆる改造の眞偽及び徹底不徹底をいかにして識り得るかといふことである。勿論吾々の本然性を純一な姿において掴み得れば何等の問題もないが、若し掴み得ないとするならば、或は習慣によつて誘惑され易いとするならば、何を根據にして改造をやり、その眞偽を判断するか。改造

は固より徹底的でなければならぬ、併し何を標準にして徹底不徹底を識別するか。若し改造が本然性の内面的自覺を要せずして、單に生活状態や社會制度や國家組織の上のみ行はれ得るとすれば、そして改造された状態の上に人間を順應せしめ得るとすれば、一層その識別判断に苦しむことであらう、何故なれば外界の事物そのものは、改造及び改造の眞偽に對する何等の標準をも提供しないからである。これ現代人が單に習慣に囚はれてその反動的な操縦を改造だと考へ、或は極めて不徹底なところに徹底を決め込んでゐる所以でないかと思ふ。例へば階級闘争や生存競争の如きは固より習慣の誘惑であり、或は舊き階級を倒して新しき階級を建てむとし、若しくは自己が他の有力な階級を支配しその權力を奪はんとするが如きは、矢張り習慣の誘惑で、不徹底なところに利己的徹底を決め込んで居るのである。この種の不徹底な態度は現代改造の至る處に現はれてゐる現象である。然るに現代人は外部の改造といふことのみに没頭し、或はその理想的實現のみを夢想して敢て本然性の内面的自覺を重視しないのは、これ現代の大なる缺陷でありそして又大なる習慣の

誘惑でなければならぬ。

謂はゆる社會的正義といふとも、随分不徹底なそして曖昧な原理である。元來人間性を物質視してゐる社會主義者がいかにして又何處から、斯かる抽象的な道德的概念を拉し來たつたかは知らぬが、このやうな概念を基礎原理として眞の社會改造が出来るかと空想するが如きは、これ最も巧妙な習慣の誘惑手段に罹つたものと言はねばならぬ。何故なれば抽象的道德的な概念といふものは、本然の自由を籠絡し奪せんとする習慣の最も鋭利な武器であるからである。更に吾々の特に牢記しておかねばならぬことは、習慣は或る程度まで吾々の改造要求を助成するといふとである。之が即ち誘惑の秘密である。他人を籠絡せんとするや、その人の嗜好要求を察して先づ欲するところを與へる。初めよりその要求に反して好まざるところを以つてしては、他人を誘惑するとは出来ぬ。所謂社會的正義なるものは一派の改造論者を誘ひ出さんとして、習慣が豫め準備してをいた餌である。その餌の中にはたとへ毒物が混入されてゐないとしても、それを食つたら最後吾々の改造は中毒し、吾々の

の努力は麻痺して了ふ。だから吾々はたとへ一時はその誘惑の手に罹つたとしても、その手段を觀破して却つてそれを利用する丈けの生命が燃えてゐることが必要である。それには絶えず自己の本然性を體驗し體認し體把してゐなければならぬ。若し強烈な本然性の把握がなければ、社會的正義は忽ち吾々の生命を冷却さして了ふ。何故なれば正義なる概念は本來何等の創造性も自由性も有つてゐない冷え切つた化石であるから。従つてそれは一時は手段として利用されても、又忽ちにして放棄される或は何うしても放棄しなければならぬ性質のものである。それは習慣の誘惑手段であるが故に、果して何ものが社會的正義であるか、それはいかにして實現されべきものであるかを識ることが出来ない。吾々は何を根據にして社會的正義を認識し、又何を標準にしてそれを正當に判斷するか。若し吾々の永恆的必然的な創造的動向たる本然性の自覺によつて認識し判斷するとすれば何故にその認識し判斷された外部的對象の中に吾々の本性を順應せしめる必要があるか。却つて一切の外部的對象をして吾々の本然性に向つて朝宗せしむる必要こそあるではないか。正義を改造の

原理とする社會主義者は、人間の本然性を生物學的な外界順應性であると考えてゐる。けれども吾々の本然性は永遠の創造力なのである、それは絶對の自由と絶對の自己表現とを要求するものである。一切の道徳も一切の權力も乃至は一切の價値も、悉く自由なるべき本然性の手段たるべきものである、由來凡らゆる道徳的概念は本然性の自由要求によつて最後に否定さるべき精神的暴力である。それは一派の眞摯なる無政府主義者によつて否定さるべき政治上、産業上の權力と質において同一のものでなければならぬ。何故なれば本然性の要求なるものは、主觀的に見れば自由なる自己表現であるけれども、客觀的に見れば一切の權力一切の壓制の根本否定であるから。従つて若し吾々に神聖なるべき人格の自由がありとすれば、それは即ち本然性の要求を外にして何者でもない。

### 3 習慣人と偶像人

以上の考察によつて、眞の社會改造は即ち人間の改造でなければならぬこと、即

ち人間の改造から出發して初めて一切の外部的改造が意義及び根據を有し、そして眞に徹底的たることが出来るといふことが解かるであらう。即ち社會制度や生活状態の改造は人間改造の必然的結果でなければならぬ。制度や組織における一切の暴力一切の壓迫一切の不平等を撤去してそこに人間を自由に解放するといふことでなく、本然性の自由創造を實現し助成し促進する爲めに一切の制度一切の組織を改造し若しくは撤廢することではなければならぬ。要するに改造は外部的でなく内面的であり、強制的でなく自發的であり、順應的でなく創造的であるといふところにその根本意義がなければならぬと思ふ。従つてそれが爲めには改造の創造的原動力である吾々の本然性を、その純一な自由な姿において絶えず把握してゐなければならぬ。そしてこの本然性の自覺及び體驗を指導するものは教育と宗教であると思ふ。即ち教育と宗教は常に内面的には習慣化され、催眠化され、外部的には絶えず拘束され壓迫されてゐる人間を改造して、その赤裸々なそして芳醇なる本然性を開顯し體驗せしむるところに唯一の責務がある。従つて正當にいへば社會改造は教

育家乃至宗教家によつて唱道され且つ指導されなければならぬものである。

ところが現代の改造運動においては之れと全く轉倒した、或る意味においては寧ろその徹底的改造に反抗した、即ちそれを阻止しようといふやうな状態にあるのは、吾々の怪訝に堪えざる現象である。近頃社會一般の改造運動に刺戟されて、教育乃至宗教の方面にも自覺を有して來たとは事實であるが、そして之れは自覺を有し得なかつた状態に比して喜ばしいとであるが、併し教育及び宗教の本來の任務から考へて見ると、決して喜ぶべきことでも稱讚すべきことでもない、むしろ彼等の不眞目と不見識とを料彈すべきであると思ふ。社會一般が改造に目醒めるまでには、教育家や宗教家は率先してそれを唱導し絶叫すると同時に、或る程度まで改造の實行に着手してゐなければならぬ筈である。そして既に社會が改造運動に目醒めたならば、その時こそ自己の子弟なり信徒なりを糾合し指導して堂々とそして猛烈に改造運動を起し、飽くまで新文化の建設、本然性の自由表現に努力しなければならぬ。彼等は眞の革命家をもつて眞の殉難者をもつて、そして永遠の勝利者をもつて自任

しなければならぬ。本然性の要求の爲めには寸毫も曲げず、改造の徹底の爲めには一步も假借しない勇氣と覺悟とがなければならぬ。かくしてこそ民衆の導師となり社會の光りとなることが出来る。民衆一般の喊聲に驚かされて漸やく目を醒まし、その強烈な進撃に引き摺られて辛うじて追隨して行くやうな教育家や宗教家は、自ら慚死すべきものである。それにも拘らず、眞の改造は自分等の畑であり、自分等のみの仕事であると言つたやうな態度で、世人の嘲笑に値ひする愚にもつかぬ改造論や運動をやつて社會を瞞着するが如きは、實に唾棄すべきの至りである。彼等の改造論及びその運動の幼稚さ加減、不徹底と矛盾とに充ちた態度は逆もお話しにならぬが、それを自ら自覺し得ずに社會主義者や世間一般の改造運動を阻止(指導ではあるまい?)しようとするに至つては、その偽善その狡猾むしろ惡むべきものがある。彼等は到底人類の永遠に生くべき眞理の體驗者たることが出来ぬ、本然性の永遠に飛躍すべき自由の改造者たることが出来ぬ。彼等は現代において最も遅れたる、最も呪はれたる、そして遂には葬らるべき者流である。

然らば何故に彼等は現代において最も遅れたる、そして最も呪はれたるものであるか。何故に民衆を指導すべき彼等の改造がかく幼稚でそして矛盾であるか。それは言ふまでもなく彼等自身があまりに盲目であつたからである。彼等は自己の永遠に新鮮なるべき本然性を殆んど化石するほどに習慣化してゐると同時に、自己の任務たる教育乃至宗教の意義及び目的を全く自覺してゐないからである。彼等はいかにも教育家らしい、宗教家らしい顔をしたたり態度を取つたりして居るが、實に農夫の息子が百穀の植ゑ付けを理解してゐるよりも幼稚なほど、自己の目的を誤解してゐるのである。彼等はたとへ口にはいかなる論理いかなる教説を弄するにしても、いかにその任務たる教育乃至宗教の目的に盲目であるか、或はむしろそれを誤解してゐるかは、彼等の態度及び運動によつて明かに看取することが出来る。彼等は常に人格の自由を信じ真理の尊嚴を語ると雖も、人間の本来性の徹底的開發といふことには毫も目醒めてゐないと同時に、その手段の實行に至つては根本的に誤つてゐる。彼等が外面的政治的には國家の束縛を甘んじて享受してゐることは尙恕すべし

としても、内面的には從來の習慣及び傳統に全く順應してゐる。むしろ習慣の天性化をもつて生命の成長と心得てゐる。これを以て從來の教育や宗教は、自由に燃えた人格の人を作らずして習慣の人を作り、真理に燃えた信念の人を作らずして偶像の人を作つて來た、即ち人間の本来性の赤裸々な發揮生命の自由表現を努力せずして却つてその去勢と化石とを助成して來た所以である。そして之れ又從來の教育乃至宗教に新鮮にして潑瀾たる創造性を缺ぐのみならず、永遠の人格及び真理の大敵として存在して來た所以でなければならぬ。現代の教育家が國民教育とか公民教育とかいつて、自由たるべき人格者を國家の制度や社會の組織に順應せしめ服従せしめむとするとの却つて教育の目的を阻害し、民衆の人格を殺す所以であるとを了解し得ないのである。更に内輪同志の反目が他宗派及び他宗教の排斥か、左もなくば權勢に對する阿附と貧民の救濟との外に何事も爲し得ない現代の宗教家に眞の信念も愛も或は偉大なる殉教も何もあつたものでない。これ彼等が全く自由及び信念を生命とする人格、及びその本質たる永恆的な本来性の要求を忘却した結果である。



既に人格を抹殺し本然性の要求を忘却して來た彼等に向つて、教育乃至宗教の眞の目的を問ふ必要はない。況して彼等の内面的體驗及び人格的信念を付度するが如きは、實に馬鹿げたことでなければならぬ。たゞ吾々は爰に教育乃至宗教の眞の目的が何であるか、その目的がいかにして實現されるかの理想的な方法について考へて見たいと思ふ。吾々は今更人格とか本然性の要求とかいふものゝ本質に立入つて鑿穿して見ようなどいふ心はない。又是迄の教育家や宗教家が自己の催眠的にその本質を忘却したやうな似而非定義によつて、教育乃至宗教の眞の目的を考へて見ようなどいふ好奇心は毛頭ない。吾々は吾々の獨特な考察によつて、その理想的な目的と手段とを端的に掴みたいと思ふ。そこで吾々の所謂目的乃至手段なるものは、從來の教育家や宗教家の考へた目的乃至手段に對して調和し得るや否や、或は全然否定的であるや否やをいふことは吾々の今問ふところではない。

4 教育及宗教の自己否定

一體教育乃至宗教の眞の目的が何であるかといふならば、余は率直に下の如く答へようと思ふ。即ち教育乃至宗教の究局の理想的目的は、つまりその徹底的な境地において教育乃至宗教を悉く撤廢するに在ると。即ち教育の目的はその究極において教育を撤廢するにあり、宗教の目的はその究極において又宗教を撤廢するに在ると言はふと思ふ。教育乃至宗教の眞の理想的目的は決してそれ自身の内部にあるのではなく、却つてその早晚否定さるべき又撤廢さるべきところに、それ自身の唯一の目的があるのである。もつと解かり易く言ふならば、教育や宗教が教育とか宗教とかいふものとして社會に存在する間は未だその目的を實現したものでなく、その目的を既に達した曉には自らその存在を否定して、本然性の自由飛躍又は自由創造にその位置を與へなければならぬものである。何故なれば教育乃至宗教の積極的目的は本然性の要求をして出来る丈け自由に、出来る丈け赤裸々に、そして出来る丈け創造的に飛躍せしむるにあるから。そしてそこには又それを強制し拘束する何者の存在をも許容しないからである。即ちそこには教育乃至宗教といへども到底存在し得

ないのである。爰に從來の教育乃至宗教と眞の教育乃至宗教との根本的に異なる差異がなければならぬ。從來の教育乃至宗教はいつまでも教育乃至宗教として、その存在の絶対權を人格及び本然的要求の上に振はんとし、眞の教育乃至宗教は極力その目的を達成した後自らその存在を否定して、一層人格及び本然性を自由ならしめ創造的ならしむるところに、兩者の根本的差異がなければならぬ。更にいつまでもそれ自身としての存在を持続せんとする教育乃至宗教は、飽くまで人格や本然性の要求をして傳統的な社會の習慣や制度や國家の制裁に順應せしむるところに特色があり、之れに反して眞の教育乃至宗教は出来る丈け速かに人格や本然性の要求をして自由ならしめむが爲めに、社會や國家における一切の習慣制度、強制的權力、暴力的服従から解放せしめ、且つそれらの非人格的非創造的な一切の存在を根本的に撤廢せんとするところに特色がある。従つて前者は習慣や社會や國家に對して悪い意味での味方であり、後者は之れに反してそれらに對する善い意味での敵であるところに、兩者の根本的差異が存在すると思ふ。而かも習慣や社會や國家に對して味

方であるところの教育乃至宗教は、人格の人信念の人を殺すものであり、それらに對して永遠の敵であるところの教育乃至宗教は却つて人格の人を作り信念の人を創造するものであることを忘れてはならぬ。眞の教育乃至宗教は人格の自由の爲めに本然性の要求の爲めにのみ、そして唯それが爲めにのみ一切の社會制度乃至一切の國家組織の拘束を徹底的に捨離せんとするのみならず、凡らゆる習慣の内面的天性化に對して根本的解脱を獲得せんとするものである。

若しそれ自身の存在を否定する教育乃至宗教が、一切の習慣、社會制度乃至國家組織に對する撤廢的捨離的態度をもつて無政府主義であるといふならば、それは甘んじて享受するところである。然り若し政治の根本理想が權力や壓制や服従に満ちた國家制度及び産業組織を撤廢して、人格の自由及び平等の實現せられ得る超國家狀態の現出にあるとするならば、絶対の自由及び愛によつて各人格の創造的飛躍を實現せんとする教育乃至宗教は、眞に徹底的な意味において超國家主義であると言つてよからう。元來習慣を解脱し、國家を超越し、社會を捨離すべきところの教育乃

至宗教なるものは、永遠に超國家主義的なものである。その社會や國家に依屬してゐるのはただ一時的の手段であつて、決してその理想でも目的でもない。何故なれば人格の自由及びその本質たる本然性の要求なるものは、たゞ超國家的な何等の権力も對立もない、理想的な圓滿なる状態においてのみ實現され得るからである。従つて無政府主義的状态といふのは何も暴力や破壊や無秩序を意味しないのみならず、内實的には生命の創造的飛躍及び人格の絶對自由を意味する。而かも尙本然性の要求に對しては極めて消極的な状態であることを免がれない。即ち政治上の無政府主義といふのは政治の自己否定であり、教育上の無政府主義といふのは教育の自己否定であり、乃至宗教上の無政府主義といふのは即ち宗教の自己否定である。そして之等の自己否定は即ち本然性の自由なる自己表現の前提であり、更に社會國家における一切組織の超越的解脱は自己否定の前提であるとするならば、超國家主義といふのは政治や教育や宗教、乃至總じて文化的理想の消極的目的であり、人類の憧憬する永遠の目標でなければならぬ。だからこの點から言へば最後の自己否定を識ら

ざる政治は眞の政治でなく、最後の自己否定を識らざる教育乃至宗教は、決して眞の教育乃至宗教でないと云ふことが出来る。

教育が教育を否定し、宗教が宗教を否定するといふ無政府主義的行動のいかなることを意味するかを、儒教の言葉を藉りてもつと説明して見よう。教育や宗教の任務は人間の本来性を外界に順應せしむることではなくて、却つて人間をしてその純眞なる本来性に復歸せしむるにあること、詳しくいへば環境や外部生活の拘束及び習慣化を悉く脱却して、全く自由にして創造的な本然性の純なる姿、悠遠なる動向を表現せしむるにあることは前述によつて明かである。従つてそれは唯本然性に達し若しくは實現するの手段としてのみ、意義及び價値を有つてゐる。手段としての意義及び價値は消極的なものであつて永遠に存在することを許されない。又それ自身の目的でもない。何故なれば手段なる價値の永遠に存在するといふとは、本然性の復歸若しくは實現をして永遠に不可能ならしむるからである。消極的な價値の目的はそれ自身を否定して、更に積極的な存在の中に没入するにある。既に手段としての

價值を有する教育乃至宗教は決してそれ自身の永遠的存在が目的でなく、却つて自らを否定して永遠の創造的存在者たる本然性の自由の中に透入するにあると言はねばならぬ。そして教育や宗教がその具體的な方法として、外部生活における一切の權力及び拘束を徹底的に否定捨離せんとするは、言ふまでもなくその眞摯なる自己否定の前提でなければならぬ。ところが人間性をして環境に順應せしめ、社會や國家における種々なる制度、組織及び傳統的習慣に都合よく調和せしめ、そしてより多く、より完全にそれに融合した所謂良民、即ち習慣人や偶像人を作つて來た在來の教育乃至宗教は外部生活における暴力や壓制を擁護するものであり、外部生活の暴力を擁護する教育や宗教はそれ自身の存在を永遠に保持せんとするものであり、そしてそれ自身の存在を保持せんとする教育や宗教は永遠に本然性の復歸を不可能ならしめるものと言はねばならぬ。これ人間の本然性の永恆的必然的な創造動向であることを忘却したと同時に、却つてそれを生物學的な或は物質的な外界順應性であると決定した結果である。かくして自己否定を識らざる現在の教育乃至宗教は、

他の政治上及び産業上の制度と同じく、本然性に對する一種の暴力であり、執拗なる習慣の誘惑である。

『中庸』に『誠なるより明かなる之れを性と謂ひ、明なるより誠なる之れを教と謂ふ』といつてゐるが、要するに教育は人間性を明かにして性の誠に復歸するにある。

性は本來誠なるものであるが習慣の束縛や權力の拘束によつてその誠を發揮するとは出來ない、教育は即ちその拘束や遮蔽物を悉く取り去つて性の存在を明かにし、その本來の動向たる誠を發揮するにある。けれども既に發揮された性は本來誠なるものであるから、そこにおいては教育の必要はない即ち教育は何事もなし得ないのである。何故なら誠は言ひ換へれば本然性の發展動向は、永遠に自由であり自律的であるからである。だから『誠は自ら成す也、道は自ら道く也』と言つてゐるのは、性の發動の自發自展的な自由を謂つたものだと思ふ。『中庸』では道とか人道とかいふものも悉く自律的に解してゐる。普通道德といへば社會一般の習慣をよく遵守し、凡て制度や組織によく順應して行くことであると解せられて居るが、そして現代の

教育や宗教は少くともその實際においてこの見解を維持して居るが、かゝるものは決して眞の道徳ではない。道徳は本然性の必然的な自由創造を外にして何者でもない。即ち『性に率ふ之れを道と謂ふ』は吾々から見た反省的な言ひ方であるが、本然性そのものから主観的に見れば、自由な自己表現の動向そのものが道である。ここに『道を修むる之れを教と謂ふ』と言つてゐる『修むる』は、決してその道を修正もしくは矯正して習慣に順應せしむることではなく、却つて習慣化の誘惑を脱却して本然性の正路に復歸せしむることだと思ふ。斯のやうに解すると『中庸』の思想は實に面白い者である、そして又斯く解する事によつて、それを何回となく空誦みした天保人と雖も、教育本來の無政府主義的理想を容易に理解し得るだらうと思ふ。

5 文化人と自由人

余は尙ほ進んで、最後にそれ自身の存在を否定せんとする眞實なる教育乃至宗教の積極的な對象のいかなるものであるかを簡単に考へて見たいと思ふ。即ち一切の

習慣化、一切の權力、一切の拘束を否定し捨離した境地において悠々濶歩する人間はいかなるものであるか。勿論かゝる人間は現在の生活状態において目撃することは出来ないが、併し苟もそれを實現せんとする教育乃至宗教の存在する以上、それが吾々人間の理想であると同時に教育乃至宗教の對象でなければならぬ。従つてそれは吾々が現在の生活を悉く超越して理想境に達した曉でなければ、その内容を實質的に經驗することは出来ない。勿論理想境において悠々濶歩する人間は、その本然性を最も純なる最も自由なる姿において表現するものであることは疑ひを容れない。併しかゝる境地における本然性の必然的動向を積極的に判断することは到底不可能である。何故なればそこにおいては一切の習慣、一切の形式、一切の手段を悉く絶するから。たゞ吾々は吾々の現在生活を悉く超越するといふ消極的な方法によつて、その外面的形相を想像するに過ぎないのである。

教育乃至宗教の創造せんとする積極的對象は、言ふまでもなく人間の本来性をその必然的動向に従つて自由に發展せしむることであるが、その自由に發展せしめら

れた人間は決して國民とか公民とか或は良民とかいふべきものではない、何故なればそこには既に國家とか社會とかいふ形式はなく、又習慣の道德的制裁がないから、たとへ有つたとしても決してそれに依屬してゐないからである。余はそれを自由人と名づけたいと思ふ、従つて自由人は從來の教育乃至宗教の積極的對象でなかつたことが解かる。否自由人は却つて彼等によつて生活意識の識闕外に放逐されて來たのである。是れまでの教育家や宗教家は表面上人格の自由とか、信念の自由とかいふけれども、彼等の謂はゆる人格とか信念とかいふことは實に怪しいそして頗る危険なものである。一方に自由人を葬り自己の本然性を去勢して來た彼等に眞の人格眞の信念を理解し得る能力がない、彼等の云々するものは單に習慣人の人格若しくは偶像人の信念に過ぎない。それは彼等の思想及び生活によつて明かに判斷する事が出来る。人格の自由とか信念の獨立とかいふことは、唯自由人においてのみ有り得ること、それは自由人の生命であり實質である。併し自由人は高く天空を翱翔する飛躍の人であるから、それ自身においては人格とか信念とかいふものを云々する

必要はない、そはたゞ地上の生活に拘束されてゐる吾々の理想であり、本然性の客觀的反映である。併し飽くまで地上の生活に順應せんとする習慣人にとつては、人格の自由といふものは無用であり且つ有害である、何故なればそれは社會生活乃至習慣生活を脅かすものであるから。地上生活において最も重要なものは自由ではなくて服従であり、順應であり、虚偽である。これ從來の教育や宗教が人間の人格を抹殺し自由人を放逐して來た所以である。ラッセルも言つてゐるやうに、出来るだけ早くそしてより多く金を儲け、出来るだけ贅澤に生活を營み、それによつて紳士の體面と社會的地位とを贏ち得ようとする虚榮人のみを養成して來た現代の教育乃至宗教は、よくも地上生活の眞髓を辨へ得たといふべきである。

自由人は最後にそれ自身を否定せんとする超國家主義的な教育と宗教とによつてのみ、作り出さるべきものである。自由人は亦文化人と名づけてもよからう。文化人は即ち現代文化の立場から自由人に到達する道程の人として、若しくは奮闘努力の人として見たものである。そしてこの場合の文化は言ふまでもなく、それ自身の

最後の理想を文化現象たる政治や教育や乃至宗教等を悉く超越して、たゞ限りなき自由と愛との外に何者も存在し得ない世界におくといふ意味においてのみ、それ自身に眞正な意義を有し得ると同時に文化人を擁護し得る道程たることが出来る。かかる文化によつて擁護された文化人こそ自由人の候補者として、吾々の憧憬と讚美とを負ふべきものである。之れに反して若し文化人を解して、政治や教育や乃至宗教等を永遠に持續せしむるところに價值を認め、文化人は即ちかかる文化價值を實現してそれに順應して行くといふものであるならば、そはむしろ有害な文化であるのみならず、その擁護によつて成立する文化人は自由人の敵でなければならぬ。文化人はたゞ自由人の道程としてのみ意義がある。自由人は永遠に獨自獨歩の存在にして、たゞ限りなき自由と愛とによつてのみ創造的飛躍を爲すものであるから、それと對立し若しくはそれを拘束せんとする何者の存在をも許容しない。若し文化人を律するに文化價值の如き概念もしくは習慣的信念をもつてするならば、そは即ち精神的暴力主義であつて、政治上産業上の暴力主義と少しも擇ぶところが無い。吾

々の自由のために又本然性の要求のために、物質的暴力主義を否定せねばならぬとするならば、同じく精神上的の暴力主義をも否定せねばならぬ、何故ならそこには最も執拗なるそして最後の習慣的誘惑が伏在するからである。

人或は言ふであらう、理想はたとへ實現され得るとしても、その實現された徹底理想境は吾々に望ましいものではない。むしろ理想を完全に實現した曉には吾々は却つて厭惡と倦怠とを感じるであらう。吾々の興味を惹き努力を要求するものは、むしろその實現の道程にある。故に吾々は自由人を理想としながらも、永遠に文化人として生きなければならぬと。これ正しく習慣の神祕なる誘惑に陥りつゝあるものである、そは一を知つて他を忘却せんとするものである。即ち習慣はこゝで吾々の徹底的自覺を喰ひ止めようと最後の努力をして居ることが解かる。成る程そこには俗人を瞞着する論理はあるけれども、自由人を掣肘する何等の力も根據もある事はない、文化人は自由人に達する道程として意義を有つて居る、併しそれは道程である、道程は目的に達して初めて意義を完成する、永遠の道程といふとはあり得

ない。若し有りとするればそれは自由人の世界においてのみ言ひ得るとである。自由人の世界は決して沈滞した無爲の寂滅界ではない。それは文化人の世界に比して一層自由な、一層無限愛に満ちた、そして一層創造的な永遠の世界である。文化人の世界が否定の世界であるとするならば、自由人の世界は永遠に無限肯定の世界である。前者を消極的創造の世界であるとするならば、後者は積極的な無限創造の世界である。前者は努力奮闘の世界であるとするならば、後者は飛躍翱翔の世界である。その自由において、その創造において、その持続の過程において、兩者の世界は到底同日の論ではない。而も自由人の世界をもつて假眠昏睡の巷となし、道程たる否定の世界をもつて永遠に満足するといふに至つては、共に無限の自由と永遠の創造とを語るに足らざる輩である。自由人の世界こそは吾々人類の永恒的理想であり、世界改造の最後の原理でなければならぬ。

文化の問題(終)

大正十一年五月廿五日印刷  
大正十一年 秋 廿八日發行

文化の問題  
定價金貳圓六拾錢

著作者 野村 隄 伴

發行者 東京市神田區表猿樂町二番地 鈴木 芾

印刷者 東京市麴町區飯田町一丁目六番地 大杉 直次郎

東京市神田區表猿樂町二番地

發行所 京 文 社

電話神田二九四四番  
振替東京八二二六番



野村隈畔氏著作書目

改訂 自我の研究

定價 金貳圓參拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

改訂 自我を超えて

定價 金貳圓參拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

文化の問題

定價 金貳圓六拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

現代の哲學及哲學者

定價 金貳圓八拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

孤獨の行者(附書翰集)

定價 金貳圓參拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

稿造 自由を求めて

定價 金貳圓參拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

イブセン原著 金子白夢氏譯 宗教的色彩に富める不朽の傑作

# 建築師ソルネス

絹表 裝箱 入

四六版二百四十頁

定價壹圓八拾錢

送料(書留)金十八錢

深刻なる社會劇より徹底せる神秘劇に轉じた第三期のイブセンの『建築師ソルネス』は、數ある彼の著作中の最も深みのある作である。此の作は彼が單なる戀愛喜劇の描寫や社會改造の問題劇に物足らずして更に現實の深みに徹して神秘的象徴的な世界に沈潜し透入してそこに現實の奥に流れつゝある新らしい光に觸れて『或物』を掴み出し、其の掴み得たるものを暗示的な表現の姿で投げ出したものが此の作である。此の作は彼の全著作中最高の名作たるのみならず、恐らくは近代文藝中の最大傑作と云つても過言ではあるまい。新神秘主義が時代の新思潮と化つて來た今日此譯の出づる偶然ではない。譯者はイブセンの熱愛者、就中『建築師ソルネス』は譯者の藝術上の戀人である。此の作はシグルド・イブセンによつて獨譯されたものを底本として譯されたもので、原作其の物の嚴密さと神秘さとが如實に寫されて居る。此の點に於て他の譯と全く其の選を異にして居る。



野村隈畔氏著 (堂々五百頁の一大力作)

# 現代の哲學及哲學者

四六版總クロリス裝  
紙數五百餘頁  
定價 金貳圓八拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

學界の渴望  
久しかりし現代  
哲學思潮  
の鳥瞰圖  
愈出づ!

哲學研究の徒の久しく渴望して居たのは、現今我國に於て如何なる哲學思想が如何なる哲學者によつて主張されつゝあるかを、系統的に闡明し且つ論評せるの書である。斯くの如き現代哲學思潮の鳥瞰圖とも云ふべきものは、如何なる學究者も須らく一本を備ふるの必要がある。今や學者の良心熾烈なる著者によつて本書の完成を見る。現代の代表的哲學者を漸く醫する。本書は、項を分つ四編四十五章、我國且つ透徹せる批判を加へたものであつて、論理整然行文亦平明、實に近來に於ける我が哲學思想界の一大收獲である。苟も現代の哲學思潮を理解し、其の歸趨を知らんとするの士は必讀を要する。

本書の目次。  
生命派の哲學 II 生命派哲學の特色：生命の問題 心身無差別論：生命學：生命の真相：透視と念寫 II 價值派の哲學：價值派哲學の特色：序論：人生の根本：哲學的羅馬ンチック功利主義：序論：主知主義と主意論：經濟哲學自我主義と經驗論：主知主義と主意論：經濟哲學

學の問題：序論：經濟學の對象：經濟哲學の必要：極概念の哲學：體驗派の哲學 II 體驗派哲學の特色：序論：純粹經驗の意義：眞實在：絕對自由の意志：文化への意志：純粹心理學：形而上學の對象。文化主義の關係 II 序論：意識の現象學：形而上學の對象。文化主義の論争 II 序論：文化主義の起原：(以下數十項)

金子白夢氏著

著者最初の一大力作!

# 體驗の宗教

總ボブリン裝、箱入  
四六版 三百頁  
定價 金壹圓八拾錢  
送料(書留) 金拾八錢

著者は宗教思想界の新人にして、宗教生活の體驗者也。二十餘年間の研鑽と體驗と相待て、今や本書成る。洪川・趙州・エツン・ハルト・エマルソン・臨濟・黃檗・保羅・道元・基督等の古聖を捕へ來て宗教的意識の妙機を發揮す。深奥なる想と含蓄ある文と相抱いて無限實在の風光を語る。紀平博士序して曰く『是亦渾然たる一個の大詩也』と思想と冥想と體驗とに生きんとするの士に薦む。

の基督(三)野の百合花(四)基督の棒喝(五)心靈の純  
一境(六)全人格の風光(七)神人融會—變貌の光耀最  
後の心境  
△保羅の禪機(一)王者的宗教(二)最高要求(三)生活  
即宗教(四)情惑の神(五)體得の風懷(九)證入の心境  
△是の轉身(一)境(八)最勝の靈能(十二)感應道交(十)  
△道元の宗教(十一)生死即生命(六)本來の面目(七)本  
地(四)心身脱落(五)序說(二)修證一如(三)一如の行道  
△遙(十一)相傳の嫡意(十二)安樂の法門(十三)身外一  
如(十四)宇宙精神(十五)超自他境  
△東洋意識の靈趣を憶ふ  
△白隠の夜船閑話  
△行乞生活

著者は宗教思想界の新人にして、宗教生活の體驗者也。二十餘年間の研鑽と體驗と相待て、今や本書成る。洪川・趙州・エツン・ハルト・エマルソン・臨濟・黃檗・保羅・道元・基督等の古聖を捕へ來て宗教的意識の妙機を發揮す。深奥なる想と含蓄ある文と相抱いて無限實在の風光を語る。紀平博士序して曰く『是亦渾然たる一個の大詩也』と思想と冥想と體驗とに生きんとするの士に薦む。

△洪川の直觀思想(一)序說(二)現實即生命(三)光耀  
無量(四)無上妙道(五)性現前(六)如實の風光(七)  
無碍の境(八)其美不可言(九)不玄の玄(十)同也其  
幾乎(十一)無爲の爲(十二)久遠の現在(十三)宗教の  
詩趣(十四)生命の躍動(十五)感格の線  
△趙州の無字とエツクハルトの神祕的思想(一)絶妙の默  
示(二)永遠の一如即一の地(四)心靈の尊嚴性(五)最  
高者の聲  
△臨濟の宗教(一)序說(二)自己の真相(三)凡  
聖不二—無碍人の自由境(四)當體の祕密(五)意識直  
接の自證(六)純粹意識の體驗境(七)自證の權威直  
△黃檗の體驗思想(一)序說(二)唯是一心(三)宇宙意  
識(四)無心究竟の境地(五)圓滿具足の自證(六)無求  
無著(七)念即眞(八)唯此一事  
△基督教の禪機(一)序說—內的經驗の象徴(二)曠野



野村隈畔氏著

『自我の研究』の姉妹編

# 自我を超えて

四六版總クローヌ装  
紙數三百餘頁  
定價金貳圓參拾錢  
送料金拾八錢

「自我を超えて」は、予の最近に於ける精神生活の必然的な轉換を叙したもので、予の精神史である。若し予の「形而上的要求」が哲學構成的作業を始むるとすれば、予の絕對價値は、正にこの精神史である。しかし哲學的認識の根本對象たる普遍的な實際に經驗したこの精神史は、その意味において哲學的意義を有するものであるといふことが出来る。予の根本基調を形成するものと思惟し、自我の哲學的認識と情熱的體験的な自我の把握とに努力した、然るに予の精神生活の必然的轉換は、自我の發展完成の理想は、自我の體験的な内部における自律的肯定の努力のみによりて達することの不可能であること、言ひ換へれば、更に自我を超えて、自我以上の絕對的存在を捉へることによりてのみ、初めて達し得らるゝものである。即ち所謂信仰生活なるものは自我の完成を理想とする倫理的な生活に於ても必然的に認容せなければならぬことを認め、故に「自我を超えて」は予が現在の倫理的な生活より宗教的生活に移入する橋梁を爲すものである。而してこの轉換移入は、生活において又哲學に於ても、極めて重要な一般意義を有するものである。思ふから、敢て本書を公にして「自我の研究」の讀者に提供する所以である。(著者)

野村隈畔遺著

# 自由を求めて

四六版總クローヌ装  
紙數四百三十餘頁  
定價金貳圓參拾錢  
送料(書留)金拾八錢

本書は、著者が恩師友人妻子に對する真情を吐露せる、紀行文感想文論文等を収録せるもの、最後の「痛まじき生存」は著者畢生の大論文として現代人の深刻なる悩みを究明し、我思想界に異常なるショックを與へたものである。

## 現代人の深刻な悩み と悲痛な叫び

一、自由人の生活  
二、美代子の温泉旅行  
三、子供の教育  
四、五先生の訪ねて  
五、萩の店頭から  
六、憶の神祕  
七、憧憬の味  
八、生活の興味  
九、現代教育と哲學及資本主義

一、歴史尊重主義の迷忘  
二、酷寒獄を出でて  
三、出獄してから  
四、愛と自由を語るべく  
五、筆禍後一年原稿  
六、私の哀れな原稿  
七、信州飯田町より  
八、獄中の哲學  
九、痛まじき生存

□□ 孤獨の行者 野村隈畔氏 著 □□

# 孤獨の行者

—附— 書 集 翰

四六版總クロリス装  
紙數三百五十餘頁  
定價金貳圓參拾錢  
送料金拾八錢

本書は  
詩人と  
しての  
隈畔氏  
を知る  
唯一無  
二の書

著者隈畔氏は、哲學者であると同時に又多感なる詩人であつた。そしてそれは詩歌を詠まざる詩人であつた。然し唯一度「未知の國へ」と題し詩に非ず小説に非ざる一編の韻文を創作したことがあつた。今、此創作に加ふるに、氏の親族妻子恩師知己友人に贈つた書翰文數十編を合せて面目を一新したものが本書である。

### 本書の目次

- 一、未知の國へ
- 二、不思議な夢
- 三、白花の咲く村
- 四、自由の樹の讚美
- 五、暗黒の森の七年
- 六、靈感
- 七、獅子吼
- 八、論難

外書翰數拾編

終